
はぐれ者お嬢様

月之輪熊男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はぐれ者お嬢様

【Nコード】

N3333Q

【作者名】

月之輪熊男

【あらすじ】

めずらしく純情ものになる予感……

scene 1

力の入らない体をどこか他人事のように感じていた。

それから少しだけ意識のはっきりした私は、自分が意識を取り戻していることに気付いた。

まぶたは強い力で押さえつけられているような感覚に邪魔されて開く気がしない。

そういえば腕も背中側で縛られているようだ。足首も同様に麻縄か何かで固定されているのだろう、膝は曲がっても足は離れない。

どうやら私は誰かに縛られてしまったようだ。困ったな。妙に冷たくてざらざらした床に寝転んだまま、起きもしない。

そういえばなぜ私は縛られているのだろう。

今までの人生を振り返るにこの私にはマゾっけはそんなにないよ
うなので自分から頼んだってことはないだろう。ないと信じたい。
いやでもどうか：まぞっけもまったく無いわけがないでもないし。
あんまりないけど友達にちょっと意地悪されたりとかは好きだと思
う。となると自分から頼んだ可能性もそう捨てたものでは：。自分
が信じられなくなってくる。

でもまあ、これはあまり楽しい状況ではないので他の可能性に当
ろう。

そういやあ。私はお嬢様というやつではないか。いや、自分でも
驚いたことに私はちよつとした小金もちの娘だ。そして両親の豊富
な資産の恩恵か被害を受けて私は金持ち学校と言われる学校に通っ
ている。通ってるといっても全寮制なので住んでいるに近いかもしれ
ない。

そうだ。わたしは昨日も学園に行ったぞ。それは覚えてる。そう
いえば昨日であつてののかな。手首の時計はどうやら外れているよ
うだしそもそも視界ゼロ。

確認の手段が無いので暫定昨日、私はいつも通りに学園で授業を

受けた。清凜学園女子高等部なんて厳格っぽい名前の通り授業の内容も厳しいものだった。英語は慣れているおかげでこなせてるけど予備知識のかけらも無い数学は私の一番の苦手。来年は間違えなく文型を取るだろう。

そして七時間のハードな詰め込み作業に耐え切った私はやっぱりいつも通りに寮へと直行したはずだ。それから自分の部屋について冷蔵庫に食材が無いことを思い出したはずだ。でもカップラーメンでいいやあとか思ったんだよ。んで着替えたりしてからご飯にシーフードのやつ食べて。

そうだ。この次のやつだ。あれだったんだ。

私は夜のジョギングを習慣にしている。愛音ちゃんなんかには言わせればイメージにあわないんだろうけどわたしは身体を動かすのが好きだしテストの集中力持続なんかにもつながる。この楽しくて効果的、一石二鳥なお得感も好き。そんなわけで毎日食後ちよっとおいてから走るっているのだ。自慢じゃないがそれなりに足は速いのだよ。

昨日もまたいつも通りにジョギング用のスポーツウォッチをつけて走りに出た。ちなみにわたしはちよっとした時計マニアだ。高校生には大目のおこづかいも八割は時計に消えていく。実家代わりになりつつある正高さんのマンションにある私の部屋にはいくつもの光り輝く時計たちがその美を競わせるようにして並んでいるのだ。奮発して買った純正の金時計からモダンなデザイナーの作品まで小さいところから集め続けた私のコレクションにはありとあらゆるものが揃っている。とはいえあんまり高い作品にはまだ手が出てないんだけど…。

さて。閑話休題して話を戻そう。いつかこの思考の脱線癖をなんとかしたいものだ。まあ、いつかとか言ってる限りは治らなそうだけどいいや。

夜中の一人歩きをするほど私はチャレンジャーでもないのだからジョギングコースは学園の敷地内を回るだけ。夜中でもなんちゃらの御

子息やら御令嬢が多いこの学園は複数の警備員さんの手によって守られているのだ。

そうして走り始めてから三十分が過ぎたくらいのところで。走る私の視界に黒いスーツ姿の大柄な男の人を見た。

暗くて顔はよくわからなかったけど、その男の人が私に向かって大きく手を広げた。

「如月良さんですか？」

とおせんぼをしたまま男が言った。この時点で十分怪しいんだから逃げろよ私。でもそのときは確か、驚いて足が自然と止まってしまったのだ。

そのままこの人が誰か、なんて返事をすればいいのか、私に何の用があるのか、なんて考えていると、砂利道を踏みつける感じの音がして私は振り向いた。背後から二人、少し身構えたまま近づいてくるのを見て、私がようやくやばいと思ったとき、さっきまで正面にいた男が私の右腕をつかんだ。

驚いてそちらに向き直れば今度は首筋に銀色のものが這う。直感的に私はそれが刃物だと思った。

「いいか、静かにしていれば手荒なことはしない。いいな」

まったく、なんてベタな。半分パニック状態でまともに働かない頭で私はそんなことを思った。そういえば妙に頭は興奮してた。その逆に答えた言葉はまた妙におちついてたな。

「ええ」

正面の男がゆっくりうなづく。そこからは一瞬だった。

捕まえられていた腕をもう一本の男の腕が抑えつけるようにつかむ。左にいた男がいつの間にか出した注射器が腕に差し込まれる。なかに入っていた液体の量が減っていく。

その意味に気付いたところにはすでに私の意識は朦朧としていた。ばか、痛くしないって言ったじゃないか――

お嬢様らしくない口調のそれは多分言葉にならなかっただろう。

s c e n e 2

それでもう確実。私は間違いなく誘拐されたようだ。

突如私の身体にM趣味な人格が現れて誰かに頼んだ線は消滅でいいだろう。縛られて放置はなかなかつまらない。でもこれが好きな人相手なら違ったりするんだろうか。ちょっと興味はあるものの、イメージしようにも好きな人がいないことを思い出した。灰色の青春まっただ中じゃないか…。

何らかの薬を打たれた私はここに運ばれたのだろう。目が覚めてからずっと、周囲には一切の気配は無い。犯人達は別のことをしている出かけているのだろう。

これなら、この締め付けてくる麻縄を外しても平気かもしれない。足と手のほうはまったく動く気配は無いものの。目をふさぐハンカチのような布は、ぎゅっとつぶって、開いて、と繰り返すうちにほんの少しずつずれていく。眼球を圧迫しないように多少加減したのかも。時間をかければとれそうだ。作業を繰り返しながらも一度思考を再開することにしよう。

さて。犯人がどうやって私を連れてきたのかはわかった。では次のテーマ。『犯人はいかにして学園内部に侵入したのか』

清凜学園は日本の首都郊外に設立された私立の一貫教育施設だ。下は小学校から上は高校、隣接して清凜大学。内部には学生寮だけでなく、教職員向けの寮や警備員の詰め所なんかもあり、24時間体制の構内警備に加え塀を乗り越えようとすればセンサーが反応しすぐに警備員が駆けつける。毎年何人もの学生が街に遊びに行こうとして捕まっている。鉄壁の布陣だと恐れられているあの学園にどうやって侵入したのか。

まず学園の壁を乗り越えたということは無いだろう。ブザーは学園内部にいればどこからでも聞こえる大きな音で鳴る。昨日は聞いてない。

そう、だから壁はおそらく越えていない。

では次の案だ。業者に紛れ込んだ説。用は扮装して侵入したんじゃないか、という案。これは一番現実的な方法だろう。そして同時に安直な案でもあるように思う。当然学園だってこれに対策は立ててあるのだ。

学園の構内に入る道は二つある。正門と通用門のどちらにも警備員が立っていて、許可の無いものは入れない。そしてそれ以前に出入りには登録されたIDカードと声紋の認証が必要で、両方なければ門は開かない。では内通者がいた可能性はどうか。これもおそらくNO。それこそ誘拐のような危険から財政界の要人の子を守るため、生徒も業者もその誕生からの経歴をすべて調べ上げられ、すこしでも傷があればじく。身辺調査が徹底されていることは内部の事情を少しでも知っていればわかることなのだ。そして在籍中の者も束縛好きな女の子並みの厳しい管理下におかれる。これがうちの学校が全寮制である理由だ。というわけでこれもなし。

となうと他の案は、と次に行こうとしたとこで少しか光を感じた。ようやく目隠しが外れるのだ。作業に集中するとそれはすぐに取れた。

仰向けの視界には、高い、高い灰色の天井が見えた。風車発電とかで使われるような三本の棒で出来た換気扇。天井を走るパイプの群れ。そしてところどころ切れた蛍光灯。これは、もしかすると……。身体を右に向ける。すぐそばに巨大なシャッターが降りている。天井も壁も材質はコンクリートみたいなものだろう。シャッターも手動では開きそうにない。横についたスイッチが開閉用のものだろう。

次に左。さっきと同じように身体を転がす。今度目に入ったのは、広大な空間と、立ち並ぶコンテナ。3メートルはあるであろう天井に届く寸前まで積み上げられたコンテナは壁から壁まで何個おきかで通路分の距離を保ったまままでならんでいる。その数は相当なものだろう。そのコンテナ群の奥にはそれを運ぶためのクレーンが見え

る。

まちがない。ここは、倉庫だ。耳を澄ますとうっすらと飛沫をあ
げる波音が聞こえる。埠頭の倉庫。悪いことにはもってこいな場所。
テンプレジャマイカ。

清凜学園は、首都近郊に存在する。そこは海からだいぶ離れた内陸
部。学園からはいぶ運ばれたことになる。窓の外はまだ真っ暗な
まま。今は冬。夜明けの時刻は六時半ごろだろう。わたしがさらわ
れたのは八時前。倉庫の周囲からは波音以外しない。まだ深夜、な
のだろうか。

体を横に向けた状態から、なんどもバランスを崩しながら膝立ちに
なって、そして立つ。それからさっき目をつけた一番近いコンテナ
まで転ばないように跳ねる。コンテナは予想通り鉄のような硬い材
質で出来ていた。手首を縛る縄を角にこすり付けるようにして切る。
手首の麻縄はすぐに取りれたが足のほうは位置的に難しそうだ。結び
目もきついし縛り方もわからないし。手でも取れないから何かで切
りたいなあ。

さて。すこし倉庫内を回ってみようか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3333q/>

はぐれ者お嬢様

2011年1月26日07時07分発行